

追悼

石牟礼道子が 遺したもの



「市民運動ではないですもんね」と、石牟礼さんがつぶやかれたことがあった。1970年初頭の水俣病闘争の最中のことである。

私が飛行機に初めて乗った

のもその頃のことで、スカイメイトという学生向け夜の格安便だった。丸の内のチツソ本社での東京行動のためにゼッケンの束を数人で運んだのである。ゼッケンには「死民」と染め抜いてあり、プリントしたシンナーの臭いが気になったのを覚えている。

水俣病闘争のシンボルともいふともなった「怨」や「死民」というアイデアを出されたのは、石牟礼道子さんである。それは、当時の市民運動や政治運動が「市民的権利」

の恢復や主張を基調としていた中で、それ近代的な権利やかれたことがあった。1970年初頭の水俣病闘争の最動を象徴的に示す言葉だつた。

私が水俣病問題に直接関わったのは1970年5月25日。水俣病の患者のグループがチツソとの斡旋を訴訟ではなく旧厚生省に一任して、死者ひとり400万円という

事件として争い、公害事件と

運動の核となつたのは、患者・家族の存在とその思いであつたが、私たちが依拠していたのは、石牟礼さんが『苦

水俣病闘争に身を投じたものかということを模索していく。裁判では、損害賠償請求はなく、旧厚生省に一任して、

水俣病闘争は、裁判を支えることで始まつたが、患者・家族そして死者たちの積年の思いをどうすれば表現できるのかということを模索していく。裁判では、損害賠償請求はなく、旧厚生省に一任して、

死者ひとり400万円という

ことだ。

水俣病闘争は、裁判を支え

ることだ。

水俣病闘争は、裁判を支え

ることだ。